
枝の葉

青匙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

枝の葉

【Nコード】

N6706J

【作者名】

青匙

【あらすじ】

病室の一角で、少女は外を眺める。

白い病室の一角に、ベッドから身を起こし窓から外を眺める少女がいた。

カーテンで区切った狭いスペースに見舞客の姿はない。

ベッドの近くの棚に、少女の私物の小さなカレンダーが置いてある。

「あと一日か……」

赤い丸がついたカレンダーの日付を見て、少女は呟く。

明日、自分はどうなってしまうかわからない。

少女は苦しくなってきた胸を片手でぎゅっと押さえ、外の景色を見つめた。

そこに、少女の同級生の少年が締め切っていたカーテンから顔を出した。

「調子どう？」

「あんまり」

少女が首を横に振って、少年があっさりと言う。

「顔色めちやくちや悪いもんな」

「……じゃあ聞かないで」

少女は疲れたように溜め息をついた。

「見た目で人を判断するなっていうだろ？」

意味が違うと思ったが、少女は何も言わなかった。

少年は差し入れの林檎を棚に乗せると、窓から曇ってきた空を見上げた。

少女も少年と同じように、少年が来る前に見ていたものに視線を向けた。

「見て。あの木、一枚だけ葉が残ってるでしょ。あの葉が枝から落ちた時が私の死ぬ時だと思うの……」

病室に、重たい沈黙が横たわる。

看護師が廊下を移動するスリッパの音が、口を閉じた二人の間を通過した。

ややあつて少女が先に口を開いた。

「それ、私の台詞」

半眼で少年を睨む。

「一回言ってみたかったんだ」

悪びれずに笑う少年に、少女はだんだん疲れが増してくるのを自覚した。

この少年は精神的に体力を消耗させようとしてるのではないかと少女は勘繰った。

無神経な少年に、非難の籠った口調で問い質す。

「明日が何の日かわかってるの？」

「手術するんだろ」

「わかってるなら、私の気持ちを察してくれたっていいじゃない」

「だって、」

「不安なのよ。不安で仕方ないの。今だって苦しいのに、ふざけてばかりで」

泣きそうになる少女。

少年は少し戸惑った。涙目の少女に明日何があるのか確認をとる。

「明日するのって盲腸の手術だろ？」

「だからなんなのよ！」

極度の緊張で顔を青ざめた少女は、極度の緊張で潰れそうな胸を押さえて少年に八つ当たりした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706j/>

枝の葉

2011年10月5日19時50分発行